東北整形災害外科　抄録

カテゴリー：小児

筆頭演者：八重樫幸典

共同演者：斎藤良輔、猪又義男、本田惠、及川博

演題名：5歳まで見過ごされた先天性股関節脱臼（DDH）の1例

抄録本文：

＜症例＞5歳女児

＜現病歴＞跛行を認めたため近医整形外科受診。X線写真にて脚長差を認め、加療目的で当院紹介。

＜現症＞Duchenne型跛行。身長120cm、体重19kg。開排制限（＋）、Telescope sign（＋）、皮膚溝非対称、脚長差は左2cm短縮。

＜画像所見＞単純X線像ではShenton line、Calve lineともに不連続。臼蓋角が47°、CE角が-5°。股関節造影では関節唇の内反や下垂、骨頭の変形、関節包峡部をそれぞれ認め、大腿骨頭靭帯の肥厚や延長も認めた。

＜結果＞未治療の左先天性股関節脱臼の診断となり、手術療法により脱臼位を整復することが目的で入院加療が必要と判断した。術式は観血的脱臼整復術と併用しSalter骨盤骨切り術を施行した。後療法としては術後4週まで左股関節を外転・内旋位でギプス固定とし、5週以降はMorioka braceを装着し全荷重歩行を開始とした。

＜考察＞先天性股関節脱臼の見逃し例が生じる原因として、出生数の減少と先天性股関節脱臼の患者数の減少により、先天性股関節脱臼に出会う小児科医や整形外科医が減少していることを挙げる報告がある。

見逃し例をなくすためには、画像診断として乳児検診にエコーとX線検査も行い、臨床診断としては臨床経験の少ない小児科医、整形外科医への先天性股関節脱臼の教育が必要ではないかと考えられた。